

日蓮大聖人御書全集

どうしょうどうみょうごしよ

同生同名御書

新版
1518
ゝ
1519

どうしようどうみようこしよ

同生同名御書

ぶんえい ねん

がつ

さい

にちげんによ

文永9年('72)

4月

51歳

日眼女

おおやみ

にちりん

破

によにん

こころ

おおやみ

ほけきよう

大閼をば日輪やぶる。

女人の心は大閼のごとし、法華經

にちりん

おさなご

はは

知

はは

おさなご

忘

は日輪のごとし。幼子は母をしらず、母は幼子をわすれず。

しやかぶつ

はh

によにん

おさなご

ふたり

互

おも

釈迦仏は母のごとし、女人は幼子のごとし。二人たがいと思

離

ひとり

おも

ひとりおも

えば、すべてはなれず。一人は思えども一人思わざれば、

会

ほとけ

思

者

あるときはあい、あるときはあわず。仏はおもうもののご

によにん

思

者

われ

ほとけ

とし。女人はおもわざるもののごとし。我ら仏をおもわば、

しやかぶつみ

たま

いかでか釈迦仏見え給わざるべき。

いし たま たま いし
石を珠といえども珠とならず、珠を石といえども石とな

らず。権経の当世の念仏等は石のごとし。念仏は法華経ぞ

もう

ほけきようとう

ほけきよう

謗

と申すとも、法華経等にあらず。また、法華経をそしると

たま いし

も、珠の石とならざるがごとし。

むかし

もろこし

きそうこうてい

もう

あくおう

どうし

もう

者

昔、唐国に徽宗皇帝と申せし悪王あり。道士と申すもの

賺

ぶつぞう

きようがん

そうに

みなげんぞく

にすかされて、仏像・経卷をうしない、僧尼を皆還俗せし

いちにん

げんぞく

無

なか

ほうどう

めしに、一人として還俗せざるものなかりき。その中に法道

さんぞう

もう

ひと

ちよくせん

恐

かお

火

印

三蔵と申せし人こそ、勅宣をおそれずして、面になやき

焼

こうなん

もう

ところ

なが

そうら

いま

よ

をやかれて、江南と申せし処へ流されて候いしか。今の世

ぜんしゅう

もう

どうし

ほうもん

あくほう

ごしんよう

よ

の禪宗と申す道士の法門のようなる悪法を御信用ある世

う

にちれん

だいなん

あ

ほうどう

に

に生まれて、日蓮が大難に値うことは、法道に似たり。

おんみ

う

かまくら

おのおの、わずかの御身と生まれて、鎌倉にいながら、

ひとめ

憚

いのち

惜

ほけきよう

ごしんよう

人目をもはばからず、命をもおします、法華経を御信用あ

ごと

覚

推

量

じよくすい

ること、ただ事ともおぼえず。ただおしはかるに、濁水に

たま

い

みず

澄

知

善

ひと

玉を入れぬれば水のすむがごとし。しらざることをよき人

教

しんよう

どうり

聞

におしえられてそのままに信用せば、道理にきこゆるがご

しゃかぶつ

ふげんぼさつ

やくおうぼさつ

しゆくおうけぼさつとう

おのおの

とし。釈迦仏・普賢菩薩・薬王菩薩・宿王華菩薩等の各々の

ごしんちゅう

い

たま

ほけきよう

もん

えんぶだい

きよう

御心中に入り給えるか。法華経の文に「閻浮提にこの経を

しん ひと ふげんぼさつ おんちから もう
信ぜん人は、普賢菩薩の御力なり」と申す、これなるべし。

によにん

譬

ふじ

まつ

しゅゆ

女人はたとえば藤のごとし。おところは松のごとし。須臾も

離

た

げにん

はなれぬれば立ちあがることなし。はかばかしき下人もなき

みだ

よ

殿

遣

こころ

に、かかる乱れたる世にこのとをつかわされたる心ざし、

だい

厚

ちじんさだ

知

こくう

高

大地よりもあつし。地神定めてしりぬらん。虚空よりもたか

ぼんてん

たいしやく

知

たま

し。梵天・帝釈もしらせ給いぬらん。

ひと み

どうしょう

どうみよう

もう

ふた

使

てんう

人の身には、同生・同名と申す二りのつかいを、天生ま

とき

付

たま

かげ

み

随

るる時よりつけさせ給いて、影の身にしたがつがごとく、

しゅゆ

だいざい

しょうざい

だいくどく

しょうくどく

落

須臾もはなれず、大罪・小罪、大功德・小功德、すこしもお

とさず、かわるがわる天てんにのぼって申し候もうと仏説そろうき給ほとけう。たの
このこと、はや天てんもしろしめしぬらん。たのもしし、たの
もしし。

しがつ

四月 日

にちれん かおう
日蓮 花押

しじょうきんごどののにようぼうごへんじ
四条金吾殿 女房御返事

おんふみ

ふじしろうどの

にようぼう

つね

寄

合

ごらん

この御文は、藤四郎殿の女房と常によりあいて御覧あ

そろう

るべく候。